

究極のオーディオラックがここに誕生  
ウエルフロートの総合力を集結させた  
空中に機材を置いているような感覚

# WELLFLOAT WELLFLOAT RACK SYSTEM

オーディオラック  
近日発売予定 価格未定 写真はプロトタイプ

●取り扱い：ジークレフ音響(株)  
※棚板には同社のオーディオボードも搭載できる仕組み。写真のように格段ともフルコンメカ搭載の「TYPE4449L」(490W×440D×55Hmm/¥98,000・税別)を載せることができる

ただ浮かせるだけでは意味がない。オーディオ再生にとって最も理想的なフローティングを追求しつづけるウエルフロートのオーディオボード。最近ではフルコンサートグランドピアノ用のウエルフロートに使用しているメカニズムを採用した“フルコンメカ”を搭載。剛性と音質が飛躍的にアップしている。そんなウエルフロートの終着点はオーディオラックであった。今回編集部に届けられたのは外観上はプロトタイプ。しかしながら、その実力は、常にクールな井上千岳氏をしても「空中に機材を置いているような感覚」と言わしめるほどの出来栄え。早速紹介していくことにしよう。



●「ウェルフロート」の魅力  
吊り下げ式の浮き構造の  
画期的オーディオボード

ウェルフロートの製造・販売元であるジークレフ音響株式会社は1978年の設立で、海外のレコーディング機器を大阪で販売したことから始まっている。まだ大阪に本格的なレコーディング・スタジオはなかったそう、マルチヤンネル・レコーディング機器の開発によって在阪の放送局で脚光を浴びたという。さらに放送局毎の仕様に対応する改造技術で実績を重ね、デジタル、ハイビジョンの時代を通じてオーディオ/ビデオ機器で幅広く活動を続けてきた。本社は大阪府池田市にある。

こうした経緯から音というものの考察によって生まれたのが、独自のインシュレーション・システム Wellfloat (ウェルフロート)である。平成20年に特許が申請され、翌21年に商品化。24年に特許が登録された。

既に周知のことと思うが、ウェルフロートの構造は極めてユニークなものである。ボードでありながら吊り下げ式なのだ。なぜ吊り下げでなければならなかったのか。それには振動に関する次のような

認識がベースにある。

機材にしろ楽器にしろ、その振動が床に伝わることで新たな振動が発生し、それが反作用として戻ることによって悪影響が生じる。また振動エネルギーが床に逃げることで、本来の音楽エネルギーが減衰する。つまり床と接することで歪みが生じるのである。接触しなければ歪みはない。そのためには浮かせてしまうしかないというのだ。

機材を乗せる形で、しかも吊り下げ式にできないものか。こういう発想で開発されたのが、ウェルフロートの機構である。

鍵はU字型のパネで、ベースが立ち上がり横向きに取り付けられている。その下辺からワイヤーが出ていて、上側のボードの字型に折り曲げた内側を吊り下げる。U字パネが外に出ていけばわかりやすいのだが、それが内側に入っているわけである。現在 Reguar シリーズと呼ばれるのが、このタイプである。

フルコンメカの登場で  
音質的にさらなる向上効果

さてジークレフ音響は、コンサート・ホールや録音などのかかわりも深い。その中からピアノやチェロ、コントラバスの振動に着

目した。ステージの床にその振動エネルギーが伝わることで、楽器の音が貧弱になるということが明らかになってきたのだ。

これを解決するために考案されたのが、フルコンメカと呼ばれる改良型の機構である。

従来のメカがU字パネであったのに対し、フルコンメカは逆L字型をしている。片持ち梁構造というのだが、この水平部分からワイヤーが下がっている形である。

このメカ1つだけでも300kgの耐荷重があるというが、ピアノ用ウェルフロートは三角形の形状にして3個のメカを内蔵している。耐荷重は250kgに及ぶ。3個使用で最大750kgまで対応できるという具合である。

同じ構造をチェロやコントラバスに應用した製品もあるが、いずれも楽器の音が見違えるようによくなり、例えばピアノだとそれまでオーケストラに掻き消されて聴こえなかったような部分でも、はっきり聴こえるようになったと大好評を得たそうである。発売は平成27年のことであった。

まさに傑出したインシュレーションシステム  
その効果は絶大と言っている。忘れ難い体験

このフルコンメカをボードに應用したのが、現在のLシリーズや薄型のSFモデルである。耐荷重は150kg。音質的にも大幅な改善が行われている。

●「ウェルフロート・ラック」が誕生  
支柱部にフルコンメカを内蔵  
棚板は水平方向にのみ動く

やや長々とウェルフロートの紹介をしてきたが、こうした経緯の末にそのメカニズムをフル活用して、ついに完成したのがここで紹介するウェルフロート・ラックである。想像した以上に大掛かりな構成で、壮観という言葉がぴったりではないだろうか。

四隅の支柱に注目してほしい。各3本ずつの組み合わせて形成されているが、その上部に三角形のパーツが乗っている。これがフルコンメカで、1カ所に3個ずつのメカを内蔵しているのだ。従って4カ所では12個。ピアノ用ウェルフロートを1段につき4個も使用した贅沢な構成である。

このメカにアルミ製の棚板が乗せてある。当然この棚板が水平に

動くわけである。ここにさらにボードを乗せてもいい。なおその下側にもう1枚アルミの板が見えるが、これは4隅の支柱を固定するフレームで、機材には触れない。

ひとりでに力強さが出てくる  
これが本当のエネルギーである

各段とも同様である。何とも堂々たる偉容と言わなければならぬ。これにウェルフロート・ボードを乗せて、早速聴いてみた。音は、厚手の肉質感に包まれて意外に当たりが柔らかい。ピアノなど強靱なのは強靱だが、ガンガン打ち付ける感触ではなくもつとていねいだ。しかも強弱の幅が広く、表現がいつそう大きくなっている。

声楽も暖かいが、余韻の乗り方がいつも増して瑞々しい。さらさらした汚れが消えて、空気そのものに艶があるようなあでやかな雰囲気包まれる。

オーケストラはダイナミックな起伏に富んで、底の方から湧き上がってくるような力感を感じる。安定して重心が落ち着き、高いと



オーディオボードを外した状態の「WELLFLOAT RACK SYSTEM」の全貌



4隅に設置されたフルコンメカにアルミ製の棚板が載せてあり、この棚板が水平に動く仕組みになっている。さらに下側に見えるもう1枚アルミの板は4隅の支柱を固定するフレームで、上の棚板とはスパイク構造で組み合わさっている



「WELLFLOAT RACK SYSTEM」の最大の要となる支柱部。各3本ずつの支柱の組み合わせで形成され、その上部に乗っている三角形のパーツがフルコンメカ。1カ所に3個ずつのメカを内蔵し、4カ所では12個。ピアノ用のウェルフロートを1段につき4個も使用した贅沢な構成となっている



写真はWELLFLOATで人気の薄型仕様のオーディオボード。「TYPE4548SF」(480W×450D×30Hmm / ¥65,000・税別)、「TYPE3545SF」(450W×350D×30Hmm / ¥60,000・税別)「フルコンメカ」仕様で耐荷重は300kgまで対応が可能

ころまで伸び伸びとしている。そう、これが本当のエネルギーなのだ。機材の信号がエネルギーを失わずにスピーカーまで伝わる。とき、こうした厚い力に満ちた音が現れるのである。そこには歪みという印象がない。濁りもなく音が澄んだまま、ひとりでに力強さが出てくるのだ。本物のエネルギー

1は、柔らかく暖かいものである。ウェルフロートはまさしく、傑出したインシュレーション・システムである。その総力をラックという構造物に組み上げると、これだけの再現力が得られるのだ。何もない空中に機材を置いているようなもので、その効果は絶大と言っている。忘れ難い体験である。